



今回、中津川は大小併せて 14 点の作品を展示した。一番広い壁面を支配した《光の船団》は大きさよりも迫力に圧倒される。大作ばかりに目を向けてもらえない。小品にも力強さが込められている。いずれの作品も何か光に包まれているような感触を受ける。仏像を見る時の雰囲気と同じ感覚が芽生えるのだ。それは無常を信条とする仏教的宗教観とは区別される。中津川は悟りを啓いたのではなく未来を見据えて作品を制作したと思われる。中津川は今年二月に京橋のギャラリー K で二週連続の展覧会を行った。その時のタイトルは「絵画は記憶に似ている」であり震災の印象よりも震災に対する自らの記憶との闘争がメインであったのではないと思う。吉岡まさみがブログで「中津川作品はどちらかというと社会や個人の裏の部分。マイナスイメージとやや暗い部分を強調してきた印象がある。し

かし今回は、どこか前向きなのである。」と指摘している通りに中津川はアウトサイダーアートや障害者といった所謂マイノリティーに対して共鳴する。自らの振り返りたくない記憶というものは自らを超えて社会に派生する。その社会そのものを描いているのが絵画一般であると解釈する中津川は正しいと思う。絵画は社会抜きでは存在しない。同時に社会も絵画抜きでは存在しないのだ。光があるから影があり影があるから光を確認することが可能となる。中津川は震災地にも訪れ人間を含めた自然そのものと自らを同化した。その表れが今回の作品に繋がった。中津川は facebook 上で「いつもですが描いている隠された意味が現れてくるのは 1 年くらい後なのでゆっくり進みたいと思っています。」と語る。一年後にはまた何かが起こるのであろう。その年輪の層にこそ、絵画が生れていく。

